

## 第 68 回 近畿地区卒業設計コンクール応募作品一覧

平成26年4月11日

日本建築学会近畿支部

### 《 短大・高専・専修学校の部 》

No.	作 品 名	学生氏名	所 属	図面枚数
1	島の学校 ～広島県大崎上島～	取釜 佐和	京都建築専門学校 建築科二部	8
2	Tea For Everyone ～お茶のことどのくらい知っていますか？～	畑山 遥	中央工学校OSAKA 建築CGデザイン科	8
③	<a href="#">「子育て世代が地域の未来を考えるための キッカケづくり」～奈良明日香村・橿原市編～</a>	石井あゆみ	大阪工業技術専門学校 建築設計学科	29
④	<a href="#">呼応する終の住処 —地域と連携した高齢者住宅の提案—</a>	後藤 裕也	明石工業高等専門学校 建築学科	6
5	岡山操車場跡地再開発計画 高齢者と児童教育の在り方	岡村 一希	京都建築大学校 建築学科	5
6	「学族」 伝統×再生×持続	張 國緯	中央工学校OSAKA 住宅デザイン科	3
7	ART/SEED/FIELD これから才能を開花させる 若手アーティストたちへ…	末永かつら	修成建設専門学校 第2本科（夜）建築学科	6
⑧	<a href="#">原型</a>	渋谷 匡利	京都建築大学校 建築学科	4
9	拡張する駅前 一駅と駅とを繋ぐー	鳥本 育未	中央工学校OSAKA 建築学科	12
10	Think Office ～ワークスタイルからライフ スタイルを考える～	松下 周平	修成建設専門学校 第1本科（昼）建築学科	5
11	共に育つ子供の楽園 京都共育センター	河原 君恵	京都建築専門学校 建築科二部	9
12	おほりのまがりかど —姫路城外堀における記憶と通学路—	中島みつき	明石工業高等専門学校 建築学科	7
13	記憶の森×本の墓場	西脇 大登	中央工学校OSAKA 建築学科	9
14	町屋リノベーション	山本 泰子	大阪工業技術専門学校 建築設計学科	29

(受付順) 以上14点<No. 欄に○印のものは入選作品>

### 《 工業高校の部 》

No.	作 品 名	学生氏名	所 属	図面枚数
①	<a href="#">GO AROUND</a>	川端 千景	大阪市立工芸高等学校 建築デザイン科	6
2	『みなと幼稚園』	島田 彩花	兵庫県立東播工業高等学校 建築科	3
3	FLY 8 ～風・光・緑 都市に憩いを～	石本 大地	神戸市立科学技術高等学校 工業科	11
4	巻貝 ～僕らの町から世界へ～	鶴田 幸成	大阪市立都島工業高等学校 建築科	1
5	Akashi Crystal Palece	熊本 崇人	神戸市立科学技術高等学校 工業科	6
6	Historical Culture Modernisticcraft	安次富 塁	大阪市立都島工業高等学校 建築科	7
7	CROSS ARCH PARK	近藤 慧大	大阪市立工芸高等学校 建築デザイン科	6

(受付順) 以上7点<No. 欄に○印のものは入選作品>

日本建築学会近畿支部

平成25年度近畿地区短大・高専・専修学校並びに工業高校  
卒業設計コンクール（第68回）審査報告

審査員長 佐野こずえ

平成26年4月11日（金） 審査会場・大阪科学技術センター（4階405号室）

審査員長（互選） 佐野こずえ

審査員 岩田 章吾・川上比奈子・田路 貴浩・中江 研・前田 茂樹・山隈 直人  
(50音順)

応募作品 短大・高専・専修学校の部 14点、  
工業高校の部 7点 (別紙参照)

#### 審査経過と審査講評

本審査を進めるにあたり、本コンクールの主旨と審査に関する内規、及び24年度の実績と本年度の応募状況を確認し、互選により審査委員長の選定を行った。審査員7人のうち2名は事前の審査を行い、その結果を当日の記名投票の集計に加えることにより参加とした。

審査は、まず昨年度の応募数と審査方法を確認し、入選作品として選出するにふさわしい作品数を内規に基づき審議した。その結果、各審査員が全作品を入念に閲覧審査し、優れていると思われる作品を、「短大・高専・専修学校の部」については全14作品の中から3作品、「工業高校の部」については全7作品の中から1作品を、各審査員が選び投票し、その後の審議を踏まえてそれぞれ同作品数を入選作品として選出することで合意を得た。

投票の結果、「短大・高専・専修学校の部」では、No. 4とNo. 8が過半数を超える得票を集め、入選作品としてふさわしいと賛同を得た。残り1点に関しては、得票数が過半数以下のNo. 3、No. 5、No. 6、No. 7、No. 12について議論を行った。No. 6、No. 7については、前者は造形的に優れている点はあるが、単調な繰り返しになっていること、後者は丁寧なリサーチがなされているが、主眼である学生と周辺との交流拠点としてのプランの妥当性が大きな課題として指摘され、選外とした。No. 3、No. 5、No. 12に関しては、引き続き議論を行った。No. 3については、問題点の抽出、地形の読み取りの丁寧なリサーチを基にしたルート提案、表現力に富んだマップの作成など総合的に評価の高い作品であるが、本コンクールが卒業設計コンクールであることから、作品の形態の是非に議論の多くが割かれた。No. 5については、操車場跡地の再開発案として、高齢者施設と児童教育施設の融合を試みた作品であり、造形にインパクトがあり、図面表現力も豊かだが、造形の必然性の説明がなく、2つの性格の異なる施設が同一の建物にあるだけで、融合できているとは言えず、複数の広場が閉鎖的になっている点が指摘された。No. 12については、地域の特性を地形も踏まえて解析し、地域を活かす仕掛けを提案しており、図面の表現も丁寧に行われていたが、複数の近接した場所に分散して計画したため、それぞれの場所の特性を明確にすることが難しく、全体模型の表現も他の図面表現のレベルにあるとは言い難いことが指摘された。いずれも高い評価を有する作品であったが、議論の結果、調査、分析、計画、図面表現といった総合的評価においてバランスのとれたNo. 3を入選とすることで合意を得た。

「工業高校の部」では、投票の結果 No.1 が満票の 7 票を集め、入選作品として妥当であることを確認し、決定した。

入選作品の講評は各選評に譲るが、「短大・高専・専修学校の部」の応募作品は、一昨々年 5 作品、一昨年 11 作品、昨年 13 作品、今年度 14 作品と年々増加しており、「工業高校の部」は、昨年の 4 作品から、今年度 7 作品と大きく増加し、多様な作品が応募されるようになってきている。最後に、残念ながら得票に至らなかった作品も個々に評価できる点があり、良いところを伸ばし、足りない点を精進して行って欲しい。また、応募作品が増加し、本コンクールの「学生、生徒の設計技能向上のために行う」という目的が今後も推進されるために、今回の審査でも議論になった作品の提出規定、審査方法、評価の観点を検討する必要性が指摘されたことを付記しておく。

(佐野)

### 「子育て世代が地域の未来を考えるためのキッカケづくり」～奈良明日香村・橿原市編～

石井あゆみ君 (大阪工業技術専門学校)

この作品の評価には大いに悩まされた。それは、あまりにもユニークだからであり、あまりにも完成度が高いからである。作品は、景観整備が進んだものの、地元民にとっては意外と疎遠な明日香村を子持ちのママに紹介する「マママップ」と、その制作のための調査レポートである。いわゆる設計された建物はいっさい含まれていない。明日香村のさまざまな場所を丹念に調査し、散策ルートを編集し、それを独特なイラストマップでプレゼンテーションしただけである。ところが、このイラストが圧倒的にうまい。調査レポートに添付されている行政がつくった味気ない報告書とくらべると、場所の特徴をはるかに巧みに捉えていて、マップを見ているだけで実際に行ってみたくなる。作者はじつはプロのイラストレーターではないかと疑ってしまうくらいである。そのうえ、子持ちのママのニーズをよく知っている。もしかして作者は子持ちなのか？ いずれにせよ、執拗な現地調査と圧倒的な表現力から生み出されたこの作品は立派な「卒業制作」であるし、今後、こうした作品はますます増えるだろう。「卒業設計コンクール」という名称は見直されるべきかもしれない。

(田路)

後藤 裕也君 (明石工業高等専門学校)

兵庫県加古川市の歴史豊かながら衰退しつつある商店街に、高齢者のための小規模施設を挿入する作品である。高齢者の行動欲求として「買い物」「通院」を捉え直し、利用者が無理なく自然に外出できるように、個室から中庭、中庭から商店街へと徐々に地域へ開く着想が素直で説得力がある。「呼応する終の住処」と題されるように、近隣の在宅高齢者も立ち寄りやすくするため、食堂や音楽室が商店街側に配され、内外のコミュニケーションが誘発されるようにも計画されている。シャッター商店街の活性化も視野に入れた提案である。内部は、入居者の生活様式に寄り添いつつ5グループにわけて居室が配されており、そこで交わされる会話までコミカルに表現されている。丁寧で優しい想像力が作品全体から滲み出ている。欲を言えば、5つの「むら」の個性を各ゾーンに空間特性として反映し、また、サポートスタッフにも寄り添った空間を充実させれば、さらに現実的な提案になったと思う。高齢者の精神的問題が取り上げられながらも、閉じた大規模施設は多く、建築内または部屋の中に引きこもる高齢者も多い。そうした中、高齢者の率直な欲求と個性に着目して、建築に何ができるか真摯に考え、解決策を提示した点は大いに評価される。

(川上)

## 原型

渋谷 匡利君 (京都建築大学校)

渋谷君の作品は、石川県の気多大社で行われる「鶺鴒祭り」が日本の祭りの「原型」とも言われたことを手掛かりに、同社隣接地に祭りの資料展示と祭事の間を一体化した空間が生み出されたものである。散在する展示ケースとそれを覆う大屋根のみで構成された半屋外の展示空間が広い緑地のなかに設けられ、人々が内外部を自由に行き来しつつ、神と人とのつながりを知る場となっている。展示ケースそのものが可動壁となっており、祭りの日にはこれがスライドし、回転することで、建物中央に気多大社と同社と縁の深い出雲大社を結ぶ直線の道が現れ、祭事の行列の進路となる。日常の展示の場が一転して祭りの場となる仮設性と祝祭性がこの可動壁によって建築化されている。建物の配置と空間構成の説得力、そしてわかりやすい図面表現は非常にレベルの高いものであった。ただし可動壁であるがゆえに、屋根の支持方法の検討が必要であるが、それが示されていない点は残念であった。構造体はその空間が虚構でなく、リアルなものとなる根拠を示す。「用」「美」だけでなく「強」も含めた思索を深めることで、建築としてより説得力を持つものに昇華されるだろう。

(中江)

川端 千景君 (大阪市立工芸高等学校)

和歌山県橋本市、南海電鉄 御幸辻駅近くの山に計画された美術館の提案です。しかし川端さんの提案は美術館というよりは建築の空間で郷土への思いを育む場所を提案することでした。現代の若者に建築それ自体の存在で刺激を与えようという、建築の力について、我々の年代のように斜に構えることなく正面から向き合った作品であることがとても高校生として良いと思います。傾斜地を生かしたこれだけ複雑な建物を隅々まで考えて作り上げた力量は高く評価したいと思います。細部まで自分の思いが入っている事を感じるプレゼンテーションでした。橋本市の現状の調査も敷地模型と共に提出されていて、計画の厚みを感じました。少し残念なのは写真の出来、張り方、英語表記の内容など、詰めの甘さです。しかしプレゼンテーションの量、内容ともに圧倒的で、審査員全員の支持を得ての入賞です。これからもこのまま成長されることを願っています。

(山隈)